

## ストラスブールの街並みから将来の日本の景観美を考える

工学部 環境土木・建築学科 1年 Y.Y

今回のストラスブール研修において、私は自身の専攻である建築および街並みに大いに興味を持ち、それらに焦点を当てて研修に臨んだ。

### 1. 今日の日本の街並み

日本の建築界は地震対策や環境問題など様々な課題に直面しているが、ここで私は日本の街の景観美について考えたいと思う。日本の街は、世界的に見て異質だ。京都のように長く続く歴史を重んじる街もあるが、そうでない街がほとんどだ。じゃあそれらが高層ビルやオフィスが立ち並ぶ現代的な街かというと、東京の中心部ですら木造二階建て住宅が今なお残っている。混沌としているこの状況が、まさに今の日本の街を形成している。

以下に、日本の街の変遷を説明した文を引用する。

『もちろん今僕たちが目にしている街並みは、特に東京においては戦後 60 年程の歴史しかもっていない。たび重なる震災や火災、戦災によって、江戸時代に明確な都市の基盤としてあった武家屋敷や町屋といった住居形態は土地の所有形態と相まって、より独立性の高い建築の集積へと生まれ変わった。』

a

歴史ある街並みというのは代えがたい価値がある。それはそこに住みついた人々が歴史のなかでつくりあげ、風土と人間のかかわりのなかで成立したものである。歴史の蓄積の産物と言っても過言ではない。欧米では代々引き継ぎ、手を加えながら使い続ける建築物が多いのに対し、今日の日本では時が経つにつれ建築物の価値は下がり、いつかは消滅してしまう。それは私たち日本人が新しいモノ好きだということが一因であるかもしれないし、あるいは近代建築の宿命であるといってもよいのかもしれない。安藤忠雄は白川郷の集落について次のような経験を述べている。

『…深い谷間のわずかな平地に、合掌造りの茅葺屋根がいくつも重なる。その風景のたくましき、圧倒的な生命感、現代建築の世界を歩みだそうとしていた当時の私に、強い衝撃を与えた。長い時の流れの中、厳しい気候風土を受け止めながら、少しずつ整えられ、つくりあげられてきた、その造形のなんと強いことか。それに対して、現代建築の立ち並ぶ風景のなんと貧弱なことか。』

…』 a

確かに従来の価値観になぞらえて言えば、このような論理は的を射ている。しかし、混沌がかつて“カオスの美学”と呼ばれたように、決して一概に悪いものとは言えないだろう。現在の街並みを受け入れ、新たに生まれる風景に価値を見出そうとする姿勢は、むしろ肯定的で積極的なアプローチであるといえる。また同じような様式や素材を用いただけの建築の集合は現在の街並みを否定し、突き詰めればスクラップ・アンド・ビルドを助長する論理にも通づる。歴史の浅い街に今更木造建築を並べたところで、所詮猿まねに過ぎないのはわかっているし、第一非現実的だ。日本は、将来の景観について新しい価値観を生み出す必要がある。

## 2. ストラスブールの街並み

ストラスブールの街並みの特徴として挙げられるのは、新旧の建物がひとつの街に存在していることだ。それも日本のように混在しているのではなく、調和という言葉が似合いそうな雰囲気醸しだしている。図1はストラスブール大聖堂前にある、木組みが印象的な伝統的な街並みである。それに対して、そこから徒歩圏内には図2に示す欧州評議会が建っている。建物だけではない。大聖堂前の古い街並みからほど近い場所にはトラムも走っているかと思えば大型ショッピングセンターもいくつか見かけた。



図1 ストラスブール大聖堂の前



図2 欧州評議会

では日本とストラスブールとの違いはどこから来るのかというと、まず人々の意識の高さにあると考えられる。研修において現地の方々と話す機会が何度か得られたが、ストラスブールの歴史を教えていただくことが多かった。また授業でも歴史について先生がプレゼンテーションをしてくださることもあったし、最後にはアルザスの歴史博物館も訪れた。その内容は何度も国境が変わったという歴史を持つことや伝統行事など多岐にわたったが、皆ストラスブールという街を誇りに思っていることが大いに伝わってきた。

研修後に調べたところストラスブールには明確な都市計画プランがあり、建蔽率、容積率だけでなく、緑地率、高さ規制、壁や屋根などの外観の色規定などが細かく規制されており、家屋の塀にまで外観との調和が求められているという。また宣伝広告に至るまで厳しい規制があり、景観を害するような看板も一部のエリアにしか許可されていない。我々日本人の感覚からすると規制が厳しすぎる、自分の家くらい自由でいいのではないかと思ってしまうが、ストラスブールの人々は街並みの重要性を分かっているため協調する姿勢が見られると考えられる。古い町並みを保存し、それらを邪魔しない範囲で新しいものも取り入れる柔軟な姿勢はストラスブールの街並みを形成する一つの大きな要因であると思われる。

次に建築資材にも違いが見いだせる。日本は火災や水害等が多い国である。また適当な資材が木材に限定されていたため、元々建物が壊れるという前提で建設がなされていた。これに対して欧米では石造りが主流で壊れにくく、実際ストラスブールには2千年以上前に建てられた建物も良い状態で残っている。ストラスブールには赤い屋根の建物が多く見られたが、これも元々鉄分を含んだ粘土を原材料にして焼き上げた瓦しかなかったためである。そのような環境の下で、我々はある種の景観美を見出すのだと思われる。

### 3. 将来の日本の街並み

では将来の日本の街並みに求められるものとは何か。最も手っ取り早いのは安易なスクラップ・アンド・ビルドをやめることだ。槇文彦が設計した名古屋大学豊田講堂は幾度か持ち上がった取り壊し計画にくぐり抜け、今では国の登録有形文化財に指定されるに至った。その一方、昨年2020年東京オリンピックに向けて新しい競技場の建設計画が持ち上がった。すぐ近くに丹下健三が設計した代々木第一体育館があるにもかかわらず、だ。どんなに有名な建築家が作った建物でも日本においては、古い、あるいは新しいものが目の前にあると言うだけですぐに乗り換えてしまうというのは街並みの保全にはつながらない。街並みの保全に必要なのは、我々の意識の改善であるのかもしれない。

#### 参考文献

- a. 東京大学建築デザイン研究室編, 難波和彦, 千葉学, 山代悟著, 「建築家は住宅で何を考えているのか」, PHP 新書, 2008
- ・ 芦原義信著, 「街並みの美学」, 岩波文庫, 2001